

賴山陽品行論序說

安藤英男

要 旨

頼山陽の没後、その學術と人となりを遡って、門生の間に熾烈な論争が展開された。この論争を通じて、頼山陽の学源・思想・信条・生活などが、次第に明かにせられ、その真価が改めて問われるに至った。その論争——往復文書⁽¹⁾——は、後に板上に上せられたが、ここでは論争の由来するところと、経緯について記し、同書解説の叙に充てるものである。

〔補注〕

(1) 往復文書

森田節齋と江木鰐水^{がくすい}、篠崎小竹^{しやうちやく}との間に交わされたが、しかし公開文書で、文体は漢文。

(2) 板上に上せられた。

河野通胤編『頼山陽先生品行論』 上下二巻・木活字。明治十四年十月刊。

拙著『頼山陽品行論』 内容は原文・訓み・現代語訳・解説など。昭和五十六年十一月刊 近藤出版社。

一 論争の発端

頼山陽の名声は、生前すでに海内を圧していたが、没後も遺著の流伝の広いこと、わが国空前の盛況といつてよく、その声望は年とともに高まっていた。その頼山陽（以下、「山陽」という）が瞑没したのは、天保三年（一八三

二) 九月であるが、それから九年後の天保十二年九月、『山陽遺稿』が上木された。それは、山陽一代の文稿のうち、通計一四篇を全十巻・五冊に収め、山陽晩年の詩篇五三〇首を全七巻・三冊に収めた大部のものである。版元は京都の五玉堂(菱屋)で、京都・江戸の両都で発売されるや、それまで伝写の不便を感じていた江湖から、大いに歓迎され広く伝播した。

ところで、この遺稿の巻末には、江戸鰐水⁽¹⁾の撰する「山陽先生行状」⁽²⁾の一文が附載された。それは約一万二千五百字より成る、山陽の評伝ともいべきもので、流暢な名文でもあったので、世の人々は大いにこれを歎賞した。ところが、かつて山陽の門に学び、鰐水の兄弟子を以て任じ、かつ文章において山陽の衣鉢を継ぐと自任していた森田節齋⁽³⁾は、鰐水の撰したものは山陽の真価を誤り伝えるものとし、鰐水に宛てて詰責の一文を送りつけた。これに対し、鰐水も敢然と応酬したので、ここに苛烈な論戦が展開された。この論戦には、山陽の旧友で当時の大儒・篠崎小竹⁽⁴⁾も捲きこまれた。しかも、節齋との往復文書は公開されて、人々の伝写するところとなり、この論戦の帰趨は当時の学界・文壇の一大焦点となった。

さて、この『山陽遺稿』の初刊(天保十二年九月)には、編集者の名前が記されていなかった。しかし、恐らくは篠崎小竹が監修して、後藤松陰⁽⁵⁾が中心となり、あとは山陽晩年の門生らによって編集されたのであろうことは、当時の人々はみな想定していた。何故なら、山陽の没後、その残務整理は、頼家に寄寓していた内弟子と、すでに京都で開塾していた山陽の門弟が立ち働いたことは当然であり、しかも彼らの総指揮に当るに相応しいものは、山陽にとって莫逆の友ともいべき篠崎小竹と、山陽の初期の門弟にして、山陽の媒妁で小竹の女婿となったところの、山陽にとって子も同然の後藤松陰であったことも、また当然の成り行きであった。山陽の遺意を履行するため、遺稿の出版

が企てられたからには、小竹と松陰が推進の中心となるべきは、山陽を識る者の等しく認めるところであった。

ところで、問題の「山陽先生行状」（以下、「行状」という）を撰した江木鰐水は、山陽が瞑没する前年から、内弟子となって頼家に寄寓し、約十ヶ月のあいだ従学した。十ヶ月という期間は、決して長いとはいえないが、しかし頼家に在って親しく師の聲咳に接し、その起居を身近かに見知っている。したがって、山陽の最晩年については、かなり詳しいものがある。彼は『山陽遺稿』が編集された当時、福山藩に禄任し、藩校・至誠館の教授に挙用されていた。しかし篠崎小竹にも鍾愛されており、後藤松陰とも親交があった。しかも彼は能文なので、その撰する「行状」が小竹・松陰の鑑識に叶ったわけである。

一方、森田節齋は、彼が十五歳から十八歳までの間、京都に遊学して猪飼敬所いかいの門に入り、かたわら山陽にも詩文の校訂を仰いだことがある。純粹に山陽の門生とはいえないが、山陽の名声が年と共に高くなっている中で、山陽に師事したことが誇りに覚え、後進である鰐水の声望が妬ましく感ぜられたのではないか、それに節齋は人となり才氣秀発、傲然たるところがあり、狷介な性格でもあったから、学者・文人の間では狼？といって恐れられていた。この狼に「行状」を撰した鰐水が襲われ、「行状」を推重した小竹が標的とされたのである。

| | |
|---|--|
| 頼山陽先生品行論卷上 | |
| 與江木骨戈論其所撰先師頼先生行狀書 | |
| 森田益 | |
| 大和森田益謹頓首致書備後福山藩講官江木骨戈足下僕與足下同遊山陽先師之門雖受業不同時嘗一奉手米又讀其文竊服其才識其後僕在備中聞足下撰先師行狀竊喜以爲先師以史學文章鳴海內獨以其少時僮 | |

第一丁 卷上「頼山陽先生品行論」図版

の校訂を仰いだことがある。純粹に山陽の門生とはいえないが、山陽の名声が年と共に高くなっている中で、山陽に師事したことが誇りに覚え、後進である鰐水の声望が妬ましく感ぜられたのではないか、それに節齋は人となり才氣秀発、傲然たるところがあり、狷介な性格でもあったから、学者・文人の間では狼？といって恐れられていた。この狼に「行状」を撰した鰐水が襲われ、「行状」を推重した小竹が標的とされたのである。

けだし節齋の所説から、その心理を忖度するならば、

一、「行状」を撰するとあらば、その撰者には経歴から推しても、最も山陽に接触して親しい者が選ばなければならない。

一、門弟の総代表ということになれば、それは鰐水のような後進ではなく、おのづから他に人がある。

一、文章の名手ということになれば、この自分を差し置いて鰐水が撰したのは僭越である。

かくて節齋の感情は昂進し、鰐水の「行状」に対する反論を起草した。当時の節齋は、京都に在って経学の帷を下していたので、この反論ができると門生に復写させ、広く知友に配って恰かも公開状のようにした。鰐水に対して、紛れもなく論戦を強要したのである。節齋は、この反論が世の注視的となることを意識して、慎重に文案を練り、文章にも意匠を凝らした。そして、草稿が出来上がると、これを予め旧交ある次のような山陽の門弟に示して同意を求めた。

村瀬藤城 とうしやう 名は駿、字は士錦。美濃の人。尾張藩領五十三ヶ村の里正。

牧 百峰 まさ 名は輓、字は信候。美濃の人。小石元瑞の女婿。京で開塾。

宮原節庵 みややちやう 名は忠龍、字は士淵。尾道の人。豪商の出、京で開塾。

野本狷庵 けんあん 名は耕、字は万春。豊前の人。白巖の弟。中津藩儒。

関藤藤陰 せきとうとういん 名は成章、字は君達。備中吉浜の人。途中、石川姓を冒す。福山藩儒。

家長頼庵 いながとうあん 名は惇、字は伯厚。大和の人。豪農の出、京で開塾。

このうち頼庵を除いては、何れも節齋の先輩で、且つ山陽門下の錚々たる者である。

そうしておいて節齋は、さらに文章の体裁や論理の立て方について、遺憾なきを期するため、草稿を旧師の近藤篤山に見せ、さらに大坂の碩学・藤沢東畎とうぶんにも見せた。篤山は名は春松しゅんそう、字は駿甫、伊予小松藩儒で、当代の大家である。東畎は、名は輔、字は元発、讃岐高松藩儒で、後に大坂に出て開塾したもの、節齋が一目置く友人である。さらに節齋は文章を練って、旧師・猪飼敬所の校閲を仰ぐとしたが、敬所はすでに八十四歳の高齢であり、しかも病篤きを以て果たさず、代って大和国八木の碩学・谷三山さんざんに校閲を請うた。谷三山は全聾ながら、博覧強記の豪才であった。猪飼敬所ほどの大家でも、三山の名声を慕って自から三山の許へ出かけ、学問について幾度か筆談を交わしたほどであるから、その学殖は並大抵のものではなかった。豪宕不羈な節齋も、三山に対しては膝を曲げて教えを請い、三山もこれに応えて斧鉞を加え智慧を授けた。

〔補注〕

(1) 江木鰐水がすい

文化七年（一八一〇年）、安芸国豊田郡に生まれた。本姓は福田氏。通称は繁太郎、名は戩せん、字は晉戈しんか。成年に及んで篠崎小竹に従学し、天保二年（一八三一）、二十三歳の十一月、頼山陽の広島帰省の帰途、備後尾道より随行し、上京して頼塾に寄寓した。山陽の没後、昌平校に学び、天保十年（一八三九）、福山藩儒に起用された。明治十四年十月病没、享年七十二。

(2) 「山陽先生行状」

『山陽遺稿』に附載されたもの。訓みと現代語訳は、拙著、『頼山陽品行論』（前出）参照。

(3) 森田節齋

文化八年（一八一二）、大和国五條に生まれた。名は益、字は謙蔵、別号は五條、晩年は愚庵といった。十五歳で上京し、牧百峰の家に寄宿して、猪飼敬所に就いて経学を修め、頼山陽に文を学んだ。十九歳で江戸へ出で、昌平黌に学び、古賀侗庵・近藤篤山にも従学した。京都をはじめ各地で経学の帷を下し、明治元年七月病没、享年五十八。遺著に『森田節齋全集』がある。

(4) 篠崎小竹
しょうちく

天明元年（一七八一）、大坂に生れた。本姓は加藤氏。篠崎三島さんとうの門に学び、その養嗣子となった。通称は長左衛門、名は弼、字は小弼、別号は畏堂・南豊など。昌平黌に学び、家塾を継いだ。頼山陽の上坂以来、これを支援し、交情極めて細やかであった。嘉永四年（一八五一）五月病没、享年七十一歳。主著に「小竹齋文稿」「小竹齋詩鈔」などがある。

(5) 後藤松陰

寛政九年（一七九七）、美濃国安八郡に生まれた。通称は春蔵、名は機、字は世張。別号は春草、鎌山など。文化十年（一八一三）、頼山陽が大垣に來遊した時、入門の礼を執り、後に頼塾に寄宿した。文政三年以来、大坂に塾を開き、篠崎小竹の女婿となった。元治元年（一八六四）十月病没、享年六十八。遺書に「春草詩鈔」「松陰文稿」「好文学」など。

(6) 猪飼敬所
いかい

宝曆十一年（一七六一）、京都に生れた。通称は三郎右衛門、名は彦博、字は希文。家は西陣の糸商で

あったが。岩垣龍溪に経書を学び、三十一歳にして帷を下して学を講じた。七十一歳の時、藤堂候の聘に応じて、伊勢国津に移り、その藩学を督した。弘化二年（一七六一）十一月病没、享年八十五。遺著に「西河折妄」「病間一適」「猪飯敬所書東集」など。

(7) 節齋に狼の異名

谷三山筆談「岳鵬舉ハ猪ノ精ナルコト『夷堅志』ニミヘタリ。然レバ節齋ノ狼タルコト疑フベカラズ」
 「愛静館筆語」第二輯。『森田節齋全集』一七七頁

(8) 谷三山

享和二年（一八〇二）、大和高市郡（なかいち）に生れた。通称は昌平、名は操、字は子正、別号は釋齋・淡庵など。家は油問屋であったが、学を好み、記憶力絶稟の天才で、殆ど独学を以て立つ。弘化元年（一八四四）、高取藩から扶持を賜わり、その学塾は藩校に擬せられた。慶応三年（一八六七）十二月病没、享年六十六。遺著に「三山谷先生遺稿」がある。

(9) 三山・節齋の筆談

「愛静館筆語」第一輯、第二輯。「二家筆談」上下卷。「筆語拾遺」（以上、弘化四年初夏成立）。例えば「愛静館筆語」第一輯に、節齋筆談「第一御禮可ニ申上ニハ、小竹與僕之筆戦天下属目。老兄ノタスケヲ得テ先勝利之カタチ、多謝多謝」と。

二 谷三山の後援

こうして練り上げられた節齋の意見書は、江木鰐水の許へ届けられた。鰐水も負けてはおられず、果敢に応酬して論戦に火花を散らせた。鰐水の側には、篠崎小竹、後藤松陰らが立っていた。鰐水の撰した「行状」を、『山陽遺稿』に附載したからには、それは当然のことである。山陽の門弟のなかでは、門田朴齋（菅茶山の甥。名は重隣、字は堯佐、福山藩儒）、岡田鴨里（名は僑、字は周輔、徳山藩儒）、川村竹坡（名は尚、字は毅甫、津藩儒）など、温厚で穩健な人々は、節齋には与しなかった。

節齋は鰐水からの反論を見て、直ちに再び駁論を起草した。そして今度は、鰐水の「行状」を大切な『山陽遺稿』に附載したのは、重大な過ちであるとして、小竹にも挑戦状を突きつけた。しかも小竹を攻撃するあまり、「行状」ばかりか小竹の書いた序文までも、精神が籠っていないと責め立てた。これには小竹も激怒して節齋の無礼を咎め、語気鋭く節齋に詰め寄った。節齋も遂に当惑して、後藤松陰に調停を依頼した。この間の往復文書と関係事項とを整理すれば、左記のごとき順序になる。

一、論戦の前提（関係事項）

天保三年（一八三二） 九月二十三日 頼山陽、京寓に於て病没する。

天保四年（一八三三） 三月 『山陽詩鈔』全八卷四冊、刊行される。校訂者は後藤松陰。巻頭には篠崎

天保十二年（一八四一） 九月

小竹の撰する「序」が掲載される。この「序」は、「天保三年壬辰冬十月、友人篠崎弼たすく撰ならびに并書」とあるが、その草稿は山陽の校訂を経たもので、小竹に対する山陽の感謝の辞も、この版本には附載されている。

『山陽遺稿』全十七卷八冊、刊行される。巻頭には篠崎小竹の撰する序文が、「題『山陽遺稿』」として掲載され、「天保辛丑五月、篠崎弼撰并書」と結んである。また、巻末には江木鰐水の撰した「山陽先生行状」が附載されている。校訂者（編集者）の記載はない。

二、論戦往復年譜

弘化元年（一八四四） 十二月

京都の森田節斎、福山の江木鰐水に対して、その撰する「山陽先生行状」を論難する一書を与える。

弘化二年（一八四五） 二月二十七日

江木鰐水、森田節斎の論難を反駁する一書を起草する。

五月

森田節斎、大阪の篠崎小竹にも一書を送って、小竹の撰した「題『山陽遺稿』を攻撃し、また江木鰐水の撰した行状をも激しく論難する。

七月

森田節斎、再び江木鰐水に書を与えて、更に行状を難詰する。

八月二十三日

篠崎小竹、森田節斎の論難に激怒し、これに対する復書を起草する。

十月

森田節斎、篠崎小竹の復書に対し、更に反駁の一書を送る。

〃

森田節斎、大阪の後藤松陰に一書を呈し、小竹への心情を訴える。

森田節齋には、谷三山が後援していたことは、すでに触れたところであるが、節齋が最初の一書を鰐水と小竹とに突きつけた直後、彼が三山に呈した書簡には、左記のような文言が見える。

與^ル小竹^ニ書、定齋^{テイサイ}話^ハシニ、僕^の之^の得意^ノ之^ノ文ト申^シ候由。是大^{コレ}不^レ然^ヲ。是甚^{コレ}不^レ得^ル意^ヲ也。比^{アレバ}下^ノ之^ノ論^ヲ行^ハ狀^ニ一書^ニ上^ル不^レ及^バ速^ニ矣。先日乞^フ御覽^ヲハ、カノ方^{ほう}ニヤリ候前^ノ之事也。最早^{もはや}遺^つシ候テハ不^レ足^ル得^ル電覽^ヲ也。

(弘化二年三月八日付。与^ニ谷子正^ニ書)⁽²⁾

書中、定齋^{テイサイ}とあるのは、小林定齋(通称は道隆、号は金芝)のことで、節齋と同郷の大和五條の儒である。これを以て見ても、節齋は自己の駁論を諸人に示していたことが察せられる。

また、論戦が白熱した同年初秋の頃にも、節齋が三山に呈した書簡があるが、これを見るに節齋が三山の後援を徳とし、その指導を仰いでいることや、相手が一代の鴻儒・小竹とあって、大いに意欲を焼やしている様子がよくわかる。また、すでに世の識者たちも、この論戦を大いに注目し、興味津々たる態度で眺めていたさまざまなことも偲ばれる。

山陽行狀一件、ヤカマシク相成。此度、浪花篠^{しほ}(篠崎)小竹トノ戰ニ相成、小竹ヨリ先日、二千言餘^{にせん}ノ文參^{まゐ}申^し候。最早都下ニテ流傳。僕ノ答書出來候を相待^{まち}居候。此度僕返書、淨^{じやう}録^{ろく}一本^ニ乞^ヒ正^ツ申^シ候。何分^{なぶん}乍^なニ御面倒^{ミツマゼ}ニ御改^{くわい}削^{さく}被^レ下^タ度、奉^り願^な上^ニ候。

先達^のテ之^の書中、宗議の宗、宋字ニ誤寫いたし候處、此度書中暗^ニ史^{ミナト}杯^ハと申來候間、得^{とく}ト御覽被^レ下^タ度候。此度之戰ひ、相手小竹ニ御座候故、都下之儒生、相撰^{あひあ}優劣如何ト評し居候由也。小竹老ニ、アル者イタリ、森田ハ先生

を小兒同様ニ思ひ居候と申候ヨリ怒リ、文章認候由。小兒同様、可^キ笑事耳也。此度、僕取^リ其要^ヲ返書相認申候。答^{フル}江木晋戈^ニ書。是^{これ}ハ先達^で而出來仕候得共、老兄^ニに乞^ヒ正候上、先方に遺^{つかわ}し候積^ニ差置候。是^{これ}又、御覽。難讀之處有^レ之候得バ、無^シ御遠慮^ニ改正奉^リ祈候。

此度、小竹議論尤甚。取^リ世人嘲^ノ至^{ツテ}晩年^ニ減^ジ声價^ヲ候ト、賴社一統評し居候事ニ御座候。トカク學者の識見が第一ト被^レ存候。僕謂有^ル才識以運^レ之。讀書一卷勝^ル他人讀^ム萬卷^ト。老兄以爲^ニ如何^ト。

僕答書中、儒名而僞^ル市街^ヲ云々。語暗指^ニ小竹^ヲ、此^ノ一句可^レ作^ル小竹小傳^ヲ。讀^ム之如何々々。

(弘化二年九月十日付。与^ニ谷子正^ニ書)⁽³⁾

さらに、この論戦も終りに近い同年十二月、節齋が三山に御礼と報告を兼ねて呈出した書簡があるが、これによれば節齋が故事を引いての攻撃は、三山に示唆されたものである。節齋が堂々の論陣を張って、小竹と四ツに組むことができたのも、その背後に三山があつたからである。

僕答^ノ竹老^ニ書。大^ニ御約介^ニ相成^リ、殊に嘉靖之一條、御吟味被^レ下^カ辱^カ奉^リ存候。其中を取捨、三行程いたし文中ニ加^シ申候。先日遺^{おく}ル後、京坂議論紛々。御推察可^レ被^レ下^カ候。僕以^テ此得^ル名事、可^レ愧^{ハズ}。併彼以^テ一時耆宿^ニ欲^{セバ}壓^{セント}僕、不^ル可^レ不^ル答也。僕モ自^{より}今以來、與^ニ諸儒^ヲ競事をやめて、京近郊ニテ僧院ニ引籠^リ治經仕候予簡也。僕、京坂諸儒、不^ズ敢置^ニ之眼底^ニ常以^ニ古人^ヲ一自期^ス。所^{ゆゑん}以^テ取^ル儒中虎之名^也。呵々

(弘化二年十二月十四日付。与^ニ谷子正^ニ書)⁽⁴⁾

はじめ節齋から、鰐水・小竹に駁書が齎らされるや、それが謂わば公開文書であっただけに、鰐水・小竹の側では黙殺すれば負けと看做される恐れがあったので、挑戦に応じて縷々反論を綴って節齋に返した。節齋はいよいよ興奮し、さらに駁論を綴って突きつけたが、論戦を重ねる度に次第に焦点が卑小なものに移り、理屈攻めになった嫌いがある。小竹としては、すでに堂々たる一世の大家であって、どこまでも節齋と渡り合えば、節齋の思うつぼで、節齋の名声を引き立てるだけである。そこで節齋からの再度の攻撃には、もはや黙殺する策戦に出た。

〔補注〕

（１）小竹の書いた序文

『山陽遺稿』（全十七巻。天保十二年九月刊）の巻首に載せられたもので、「題『山陽遺稿』」と題する一文。天保辛丑五月、篠崎弼撰并書とある。

なお、訓みと口語訳は、拙著『頼山陽品行論』一四五—一五一頁参照。

（２）弘化二年三月八日付、節齋が三山に呈した一書

『森田節齋全集』二三七—二三八頁

（３）弘化二年九月十日付、節齋が三山に呈した一書

『森田節齋全集』二三九—二四〇頁

（４）弘化二年十二月十四日付、節齋が三山に呈した一書

三 論戰の終末

節齋としては、返書が来ないのでは仕方がない。しかし、これまでの論戰によって、自己の文名も大いに高まり、文壇にその人ありと知られるに至ったので、効果は上々であったと思われる。節齋も矛を収めざるを得ないが、小竹や鰐水から返書が無かったことを、彼らを沈黙させ得たと自得したのであらう、これより一年余の後、節齋は意氣場々として谷三山を訪ね、この師友に対して論戰の報告かたがた、その指導に深謝を表している。

なお、この時の節齋・三山の対談は、筆談のかたちで完全に遺っている。高取藩士・築山愛静あいせいの館で行なわれたので、その筆談録は「愛静館筆語」と名づけられた有名なもので、三山が全聲であったため、かくも珍重な記録が生まれたのである。この筆語から引くと、先づ冒頭のところに、次のような語が見える。（漢体は書き下しに、片仮名は平仮名にした）

節齋の挨拶

第一に御禮申し上げ可きは、小竹と僕との筆戰、天下しやうもく属目す。老兄（三山）のたすけを得て、先づ勝利のかたち。多謝多謝。

この「愛静館筆語」は、弘化四年（一八四七）四月、五日五夜にわたって続けられた記録で、相当な大部のものであるが、節齋と三山の会話のなかに、小竹を罵倒する箇所が随所に見える。鰐水の後ろについていた小竹に、いかに

憎惡を抱ていたかがわかる。行状をめぐつての論戦は、弘化二年を以て終つていても、敵対感情はその後も激しく続いていたのである。いま、筆語より、その部分を少し引いて見たい。

節齋 僕、坂（大坂）に下る毎に、小竹、酒肴を設け、僕と忘年の交を結ばんと欲す。且つ、人に對して僕を以

て畏る可しとなす。彼も亦、一箇の姦雄。僕、あに其の術中に陥らんや。

三山 小竹、ただ是れ俗儒。焉ぞ能く賢契（貴方）を籠罩し得んや。

節齋 此の人形、節齋、小竹を提ぐるの圖なり。

三山 雀が『蒙求』⁽³⁾を囀り、鶯の歌よみし事は聞きたれど、狼が文章を以て世に噪ぎ、名に高き小竹先生をさへ、小脇にはさむとは、四大洲未曾有の珍事というべし。

節齋 家生（家長韜庵）上京の時、小竹を訪う。小竹曰く、「足下、京に出て、何ぞ賣てくう藝あるや」と申す

由。此事、家長、僕の爲に道う。僕、切齒して曰く、「此時に方り、盍ぞ奇語を吐かざる」と。小竹、弱を壓す。其の言や憎む可し。一昨年、色々、海屋（貫名氏）を愚弄せしよし。

節齋 山陽の友、大抵は碌々たる凡人多し。獨り小竹のみならざるなり。余、山陽の爲に之を諱む。

もつて節齋の氣焰を知ることができ、三山はかかる節齋の壯氣を愛したが、しかし節齋の狷介な性格と、酒を飲んで人を罵る惡癖とは、これを矯正させたいと思い、折にふれ忠告したらしい。酒癖のあることは、小竹が節齋に対する返書にも述べてあるので、誰でもがこれに眉を顰めていたらしい。あるとき三山の忠告に、「近ごろ一鰕生（一俗人）ノ話ニ、賢契（貴君）、性タルコト峻急、好ンデ人ヲ罵ル。人多ク能ク堪ヘズ。往々避ケテ之ニ遠ザカル。儒林（儒者）中ニモ絶交四五人ニ及ブト云。未ダ虚實ヲ知ラズ候得ドモ、少シハ跡アルコトニヤ。……愚（三山）ノ多言ヲ待タズ、且ク古人ヲ學ビ、當ニ其長ヲ取リテ其短ヲ舍ツレバ、方ニ嘉キ學者ト爲ラン。賢契、希黯ヲ以テ字トナス。蓋シ汲長孺（汲黯。漢の名臣）ヲ學ブ者ナリ。汲ニ於テ、吾其ノ直（氣節）ヲ取リ、其ノ隘（激情）ヲ取ラズ。賢契ノ如キハ乃チ其ノ隘ヲ并ビニ取ルカ。且ツ賢契ノ人ヲ罵ルヤ、往々酒後ニ發ス。亦汲ト稍々異ル。幸ヒニ施（此）ヲ思ヒ、爾後ツトメテ其心ヲ寬ニシ、其氣ヲ平ニシ、躬自ラ厚クシテ、薄ク人を責メバ、タゞ其德ヲ畜フノミニアラズ、且ツ病ヲ卻クベシ。奈如々々。愚（三山）が如キ、惡ヲ疾ムコト賢契ノ下ニ在ラズ、然ドモ人ヲ罵ルコトアタハズ。賢契モトヨリ我ニ代テ人ヲ罵ルモノ也。コレ賢契ノ快キ也。然レドモ竊嗟（ひそかに心配する）ナキコトアタハズ。故ニ一タビ之ヲ言フ。唯、賢契、其ノ愚ヲ怒シ、其の誠ヲ諒トシテ可ナリ」（嘉永三年六月二十三日付、『三山谷先生遺稿』）と述べている。

これを見ると、三山ですら小竹と同じように、節齋の氣性を責めている。したがって、「行狀」をめぐっての弘化期の一大論争は、この節齋の氣性そのものに、最も大きな関連のあることがわかる。一方、節齋から慢罵を浴びた鰕水も、果敢に応戦したため、かえって自己の文名を高めるに至った。この一大論争は、仕かけた方も、仕かけられた方も、その文才を大いに天下に謳われるよすがになった。

小竹の側では、当初から節齋の攻撃を、軽く受け流すつもりであつたらしいが、己むを得ず論争に引きこまれた。しかし、やがて返書を打ち切り、節齋の疲れを待ったのは賢明であつた。もはや論争は理窟に傾いていたから、しぜん下火になつていたともいえよう。行状は遂に改訂されることなく、『山陽遺稿』もそのまま版が重ねられた。節齋も対案を作るでもなかつたので、この問題はいつしか人々の話題から消えていった。

ともあれ、鰐水の撰した行状は、なかなかの名文であつた。区々たる詮索はしばらく措き、幕末の動乱期に、山陽の遺著が大きな役割を果たし、これと共に山陽の声価がますます高まつたのとあい関連して、行状も多くの人々の心を搏つた。まさに山陽が生々いきいきと描写された名文であり、弘化期の一大論争を通じて、いやが上にも有名になつた。節齋もこれを逸つて文名を揚げ、頼山陽その人の声価の上にも、大いに効果的な行状であつたといえよう。

〔補注〕

(1) 「愛静館筆語」(谷三山と森田節齋の筆談)

原本は、奈良県橿原市・谷道英氏所蔵

『三山谷先生遺稿』(大正六年一月刊、奈良県高市郡教育会)、『森田節齋全集』(昭和四十二年十月刊、奈良県五條市)、その大部分が収録されている。

(2) 五月五日の筆談

従来は三日三夜の筆談といわれていたが(谷三山百年祭記念事業推進会刊「伝記谷三山」、原本によれば五日五夜に亘っている。(弘化四年四月)

(3) 雀が『蒙求』を轉り

勸学院の雀は『蒙求』を轉ると謂われた故事。勸学院は嵯峨天皇の弘仁十二年（八二二）、藤原冬嗣が同族の子弟のために、三條の地に建設した私学校で、官からも特殊の待遇を受けた。『蒙求』は唐の李翰が、童蒙（生徒）のために、著名人の言行を輯めて、四字句の韻文を積み重ね、教訓歌の体裁をとったもの。生徒がこれを朗誦するさまは、雀の轉りにも以た長安音をもって、棒読みをしていったものである。

(4) 嘉永三年六月二十三日、三山が節齋に与えた一書

『三山谷先生遺稿』書簡篇。一二四—一二五頁、与三森田節齋一書。